



白虎山

鳥居 大誠

白虎山

鳥居大誠

目次

屏風の虎	4
冠高山の虎	9
物差しの虎	13
秘密の虎	17
永遠の虎	23
人物相関図	26
寅年の作者によるあとがき	27



屏風の虎

古くから語り継がれる物語に疑問をもったことはないだろうか。そこまでたいそうなお話でもないのに、なぜ百年以上も語り継がれるのだろうか、と。この「屏風の虎」という物語も一時期は村の誰もが知る有名なお話であつた。しかし時の流れにより人々の興味が別のものへと移り変わると、いつしかこのお話は記憶の果てに葬られていくのであつた。従つて現代に生きる子どもたちは、この「屏風の虎」という物語を誰も知ることにはできなかった。とある少年が井戸に落ちなければ。

とあるタダツグという筆まめな男が長い巻物に記して語り継いだ内容によると、その昔、北の国の冠高山かんこうざんという雪山は白虎山びやくこと呼ばれていたそうで、その山には野生の虎が何十匹、何百匹と生息していたらしい。大きいものだと軽く十尺を超える体長のものがあちらこちらに居たという。

当時白虎山の麓の村の金持ちの家には金の屏風が備えられており、さらに金に余裕があつた村の長なんかは、地域を渡り歩く筆師に深く頭を下げ、墨液で大きな虎の絵をその屏風に書いてもらつていた。虎は昔から強くて力のある動物とされており、屏風の虎をひと目拝もうと隣の村から何時間とかけてこの村にやってくる

民もいた。ある朝のこと、一人の崇拜者が屏風を前にして本物の虎を見てみたいと呟やいた。それには村長も黙って驚いた。この村に住む人々は誰も本物の虎を見たことがないのだ。その呟きに賛同した村長はあらぬとか、自身の金の屏風と大金をかけて、村人に本物の虎を生きたまま連れてくるように命じたのだ。

村人、特に大黒柱なる男どもは、家の名に懸けて一生懸命本物の虎を探そうとした。しかし、どこを探せばいいことやら、虎がどこに生息しているかなど、誰も知る人はいなかったのである。倉にも森にも少し遠くの村にも虎は生息しておらず、あきらめ始める人もちらほらと出始めた。探し疲れて屏風の前に座ったカガという男は墨で描かれた虎を見て気づきを得た。

「この虎はやはり見事だ。筆師は本物の虎にあつたことがあるのだろうか。毛並みまで一つ一つ、丁寧に描かれている。金屏風に墨液で書かれてあるというのに、この虎は白くて美しい」

はつとしたカガは急いで旅の支度をし、この北の村で一番標高が高い冠高山に登り始めた。

「虎は黄色いと聞いたことがある。けれど屏風の虎はまるで雪を被っているみたいだった」

カガは人生で初めて山へと足を運ぶ。驚くことに山の麓から少し登ったところにも井戸付きの古びた家があつて、そこから更に山を登ると、霧は深くなり、とうとう人の気配がなくなつたのである。そして、読み通り無数の虎がいることを村の誰よりも先に発見したのである。しかし、カガには虎を連れて帰る度胸も体力もなか

った。後日改めて仲間を集めて登山することも考えたが、手柄の横取りを真つ先に危惧したカガは虎の生息情報だけをもつて下山したのである。村長と皆が集まる集会場でこの話をする、皆はそれを簡単に信じたようだった。

「しかしね、虎が実際にここにいるわけではない。だからその虎を連れてくるまでは、この屏風は譲れんな」その一言で、とうとう村を上げた虎狩りが始まったのである。虎と対峙しての捕獲は一筋縄ではない、そう考える村人は皆トラップを使うようになり、数か月もすれば誰でも虎を捕まえられるようになっていたのである。村で一番初めに虎を捕らえてきたのはハタ家であつたが、僅差で次々と山から虎を持ち帰るものが現れて、村人がこぞつて持つてきた虎には全く値がつかなかった。

「それで、屏風は」

「そうだな。一番初めに情報を教えてくれたのはカガ君だったが、実際に捕まえてきたのはハタ一家だったな。屏風は一枚、虎の絵を割ることはできない。どうしたものか」

「それでは、この屏風を皆のものにして、私と虎の捕獲者の名前を屏風の後ろに記していったらどうでしょう」

「悪くはない。でも、虎なんて今やだれにでも簡単に捕まえられてしまう」

「そうしましたら、これからは大きい虎を捕まえてきたものが新しい記録として名を残せるようにするのほうでしょう」

以来屏風がもらえるわけでもないのに、名前のためだけに、誰が一番大きな虎を持ち帰ることができるかという勝負が村で流行るようになったのである。もちろん、その過程で山で死んでいった者も多くいた。

当時山の麓から少し登ったところに住むトウコという十二ほどの娘は、ある日の夕暮れ、一人で白虎山に迷いこんでしまった。危険な地帯とも知らず奥へ奥へと進んでいくと、五尺ほどの白い虎に出くわした。虎は寝っ転がってただじっとトウコの方を見つめている。よく見ると左足には枷のようなものがついており、足から血を流しているのだ。ハッとしてトウコは虎に向かってゆっくりと近づき、虎の左足の方へと回り込んで、枷を外してあげたのだった。虎は彼女を見つめ、ごろごろと喉を鳴らすと、深く一礼をして山奥へと足を引きずりながら帰っていった。トウコもまた、ふらふらと自分の街へと戻ったのであった。それから約十年が過ぎたころ、トウコの家に一匹の虎がやってきた。しかしその家には誰も住んでいなかったのだ。虎はその家の庭で人を待った。

「この家のものに用事かい？　もうそこには誰も住んでおらんよ。心優しき一人娘もこの前火葬を終えたばかりさ。そういえばこの娘は十年前、一匹の虎を助けてあげたって言っておった。もしかして、お前さんのこ

とかい。そんな悲しい目をしないで山に戻りなさいな。あんたは大きい。今はもう破れてしまったが、かつての私の屏風の虎と同じくらい大きい。そんなところにいたら捕まってしまうかもな。ほら、行った行った。私は君なんかを捕獲しないさ。私の一言で沢山の人と虎が死んでいつてしまった。だからこうして、偶には山に参りに来ているのさ。もう虎狩りはめっきり減ったよ。この山にも誰も訪れまいが、ここは虎のいるべき場所じゃねえさ」

虎は啞えていた青い木の実を三つほどその家の庭の古びた井戸に捨て、また山へと戻っていったのであった。それから更に半年が過ぎた時、村に住んでいた少年の失踪事件が起こってしまったのである。村のどこを探しても見当たらない。疾走したその少年が虎狩りに初成功したハタ家のご子息であったことから、村では虎の呪いがかけられたのではないかと噂になった。結局少年はその疾走の数日後にひよつこりと村に現れ、ハタ家のはた迷惑として事件は幕を閉じたのだが、虎の呪いの噂が広がりすぎたこともあり、誰も白虎山には近づこうとしなくなったのだ。

冠高山の虎

時は現代、地球の異常気象により冠高山は麓の方でも雪が吹き荒れるようになり、一般市民の登頂が禁止されるようになっていた。しかし、その山に登頂をしようとする五人組がいたのだ。名前なんて今言っても忘れてしまうかもしれないが、そうし想史、かよ、わたる渉、みちかず導和、ゆたか豊の五人である。うち想史と導和はもう四十代前半にもなる男で、あとの三人は全員十代である。イエイチという達筆な男が記した手記の情報によると、冠高山には不治の病気を治すトトの実があるという。全く確かな情報ではないのでわざわざ危険な山に確かめに行こうとするものは今まで一人もいなかったのだが、想史の娘であり、かよの妹であるきよが不治の病に倒れてしまったため、藁にも縋る思いで登頂隊を結成したのである。他の山で登山経験のある想史の同僚の導和、かよの同級生できよの先輩にあたる渉、きよの彼氏の豊、と決して登頂に成功するとも思えないメンバーなのだが、覚悟だけは決まっているようであった。全員肩掛け鞆には鈴をぶら下げて、木製の杖を片手に持ちながら、導和は地図係、かよは体調管理係、渉は食糧管理係と分担を行って登山を開始した。ひどく寒く、時には前が見えない時もあり、いつ雪崩が起きるかもわからない。街でストロブにあたっていた時に想像していた登頂とは比べ物にならないくらい過酷な道のであった。おまけにトトの実の存在すら怪しいとなると、想史は登山の途

中、子どもたちを危険に晒してしまったことに後悔している様子を見せていた。何度か登山をあきらめようと提案するも、他の四人が前向きでいてくれたこともあって、なんとか精神状態を保っていたようだった。すると突然吹雪が緩くなって、茂みが動いた。

「虎だ」

「まさか、本当だ」

「どうする。下山するか、さすがに」

「でもトトの実がなければ、きよちゃんの病が」

そう小声で会話すること数秒のこと、野太い声が五人を包み込んだ。

「でてきなさい。襲ったりはしない。人間には助けられた恩がある」

「虎か、喋るのか」

「ヒトの実が欲しいのだろう」

「ヒトの実？ 巻物にはトトの実って」

「父さん、きつと読み間違えたんだ。きつとヒトの実こそが、トトの実なんだ」

「虎よ。そのヒトの実をいただくことはできないか。一つでいい」

「そうだな。では生贄となるものを一人決めよ。ヒトの実はヒトの死からできている。だからヒトの命に触れる効果がある。今まで多くのヒトがこの山で死んだ。それが養分となって、今ヒトの実がある。私はこの実を作り続ける。少しばかり待つてやる。将来のヒトの実となるヒトを、今ここで、差し出せ」

「よく喋る虎だ。想史、どうする」

「このままではきよちゃんが」

「俺は下山したいと思う。いくら次女の為とはいえ、四人をこれ以上危険な目に合わせるわけにはいかない。豊君にも申し訳ないが、娘が死ぬまではきよを愛してやってほしい。それでどうだろう。かよ、お前は思うう」

「私も、これ以上は登れないと思う。きよも大切だけれど、今ここにいる四人も皆大切だから、自分の手で強引に運命を変えることなんてできない。本当に私たちがすべきだったことは、下山して、きよの余生を笑顔で見守ることだったのかもしれない」

白い息を交えてそう話し合った五人だったが、涉だけは考えが違ったようだった。

「虎よ、一つ質問がある。一人生贄を差し出したとして、我々は必ずヒトの実を一つ、手にすることはできるのか」

「ああ、山頂までにお前たちが死んでしまったらそうはいかんが、一人ヒトをくれたなら、山頂までの道を通そう。案内はしないがな、そこまで難しい道でもない。山頂に生えた大木から、一つ実を持っていくがよい」

「なら僕の身を差し出そう」

その鋭いまなざしに四人は絶句した。

「渉君、なぜ」

「お父様とかよは家族としてきよちゃんに顔を合わせる必要がある。豊君もきよちゃんの横に居てほしいと思う。下山には土地勘の優れた導和さんがいなければならない。一方で僕はきよちゃんからしたらただの先輩だ。今までかよにもたくさん救われたことがあった。だから、僕は僕の身をもってその恩返しをしようと思う」

「しかし」

「とめないでください」

虎は渉の背中を咥え、四人には見えないように牙を刺した。道は開け、四人は進まざるを得なかった。そこからの道のりも虎が言うほど決して楽ではなかったが、四人が諦めないで登頂に成功したのは、渉の気持ちに応えたからかもしれない。一行はヒトの実を一つ拝借して、山を降りて行ったとさ。

物差しものさしの虎

五人の話というのは、英雄伝説として、暫くその街で語り継がれるようになった。彼らの登頂成功から半世紀以上が過ぎた今、街は昔に比べて商活動がやや活発になり、みんなが貧しいという時代を切り抜け、一般市民の中でも富の差に大きな格差が生まれるようになっていた。その差はまず着る物に影響を及ぼした。せめて自分をよく見せようと考えた若者市民たちの間では、ただの肌着の前面にお花がいつぱいついた服が大流行した。前面だけを取ってみれば美しく、背面はぼろぼろの肌着なのである。章子しょうこという街の娘もそんな服に身を包む若者の一人であつた。若者と言つてももう二十歳をすぎた年齢なのだが、特に取り柄のない家庭の長女として生まれ、家の手伝いで一日が終わるような生活を毎日送つていた。容姿も特別良いわけではなく、金持ちの息子に好意を持たれるわけでもなく、すれ違い際に二度見もされないような娘であつた。

「ヒトの実、ヒトの実があれば」

彼女は自分の知り合いに声をかけた。集まつたのは肉体の引き締まつた古くからの知り合い男性八名と、頭は良いが見てくれは良くない咲さきという女友達一人。章子は咲に地図を渡し、街の皆には内緒で登山を決定した。噂に聞くほどの険しい山道であつたが、章子は誰よりも先を急いだ。

「咲、次はどっち？ こっちであつてゐるの？」

「章子ちゃん、ちよつと休んだ方が良いよ。このペースじゃみんな疲れ果てて動けなくなつちゃうわ」

「うるさいわね、地図が読めるかと思つて連れてきたのに、あんたが一番ドンケツじゃない」

「私はみんなの体力を考えて言っているのよ」

「それも分かるけどさ。もう行くつて決めたから、着いてこれないならあんたなんかいらないわ」

そうして章子は男どもを連れて上へと登つて行つた。時におぶつてもらつていたことも追記しておくべきかもしれない。そして章子はとうとう虎に遭遇したのであつた。

「ホ、ホワイトタイガー、なぜこんな雪山に」

さすがの章子も、ひるんで言葉が出ない。

「何をしに來た」

「こいつ喋るのか。章子ちゃん下がつて。俺たちはヒトの実を取りにきた」

「ほう、そうかい。ならば生贄を貰おうか。等価交換つてやつだ」

章子は恐る恐る虎に話しかけた。

「分かつたわ。咲という女を捧げよう。もう少ししたらこの場所に到達するはずさ。私は先を急ぎたい。彼女

がここまで来たら何も話さなくていい、ただ襲つて食い殺せばいい。それでどうだろう」

「咲という女で良いのだな。分かった。道を開けてやろう」

そうして章子は山頂へと向かつて突つ走つた。男どもも必死に着いていこうとするが、山頂に着く前に脱落していく男は少なくはなかった。咲を見殺しにはできないと、罪悪感に駆られて引き返す男も居た。隊は乱れてしまつて、もう誰がどこにいるかなんて誰も把握していない状況である。

「君が咲か」

しばらくして咲が山の真ん中までたどり着いたとき、虎は彼女に声をかけた。咲も喋る虎には驚いた様子を見せていたが、冷静な対応を見せた。

「ええ。よくご存じで。私は咲です」

引き返した数名の男どもは虎と咲が向き合っている様子を見て、間に合わなかつたと目を伏せた。

「咲は何のためにここまで来たのだ」

「私たち十名の登頂を成功させるためにここまで来ました」

「先ほどここに来た女とは知り合いか」

「はい。仲間です」

「そうか、なら悪いことは言わない。今すぐ下山しなさい。そこでコソコソと見ている男たちと共に」

そう言われて隠れていた男性陣も姿を現して咲のもとに歩み寄った。

「いいかい。虎からの忠告よ。こんな山に登ったって何も得られやしない。誰かには凄いと思われるかもしれない。けれどそれは誰かの価値基準だ。他人の価値基準で自分の価値を決めるなど、愚かなことだと気づかないのかい。自分がしたいことを勇気をもってしないから、目的を失って他人の評価が大事になる。だから嫌われないように生きようとする。他人を気にしすぎるから、時に人は仲間を蹴落とそうとしたり、陰湿ないじめを働いたりする。家が貧しくても、顔が貧しくても、貧しい心を持たなければ人間は幸せになれる。それを忘れるな」

そう言い捨てると、虎は霧を撒いて姿を消した。

「章子のこと、食べないでね」

咲はその弱った体で力の限り叫んだ。そしてそのまま街へと帰って行ったのであった。

「しかし、喋る虎がいるなんて」

「なんでこんな大切なことを、あの五人は語り継がなかったんだ」

秘密の虎

「きよおばあちゃん、聞きたいことがあるんだけど」

みしみしときしむ床をゆっくりと踏みしめて横になった祖母のもとに歩み寄ったのは孫の咲であった。

「どうしたんだい、咲ちゃん、改まって」

「五人の英雄の話、してくれないかな。きよって子、きよおばあちゃんのことだよね」

「登ったんだってねえ、あの山に」

「その話、お母さんから聞いてたんだね」

「酷く険しい山道だったかい。私がちゃんとお話をしてやっていればよかったね。私が死ねば真実を知る人なんかいなくなってしまう。そろそろ話してもいいかな」

咲は部屋のふすまを閉めて、おばあちゃんの横に寝転んだ。

「昔ね、昔って言っても大昔よ、この町がまだ村だった時代のこと。一枚の金の屏風があつたんだ。歴史博物館に行ったことはあるかい。前に行ったときにはそこに飾られてあつたよ。よかったら見てきなさいね。その屏風の裏には今まで虎を捕まえてきた人の名前がずらっと刻まれている。初めに虎を捕まえたのはハタ家とい

う一家だった」

「ハタって」

「そうよ」

「きよおばあちゃんの旧姓？」

「ええ。村の時代のハタ家は父母兄妹の四大家族だったんだけどね、虎狩りの時に未だ一人で歩くこともできない妹が死んでしまったんだ。虎に食われたわけではなく、凍死だったそう。妹を亡くした代償は大きかったけれど、ハタ家はある程度のお金を村長からもらい、村でも一躍有名な人になった。けれど長男は許せなかった。名前は確かハタ・イエイチと言ったな。ある日イエイチは疾走したんだ。村の人は皆虎狩りの呪いだと言っていたが、真相は違っていた。村長の金屏風が破れていたのはイエイチが疾走する何日か前のことだったんだけれど、結論から話すと、屏風はイエイチが破ったんだ。こんな屏風があるから、人々は山に登って軽々しく命を落とすんだと。命より村からの承認がそんなに大事かと言って破ったらしい。夜中に村長の家に忍び込んで、屏風に飛び乗って破ったという話だよ。でも、その様子を運悪く村長に見つかってしまって。村長は激怒した。激怒して村長はイエイチの首を絞めて殺めてしまった。彼は数日、自宅の押し入れに死んだイエイチを押し込み、死体の隠し場所を必死に探した。屏風が破れてしまったこともあって人々は呪いを信

じ、白虎山には近づくなくなった。そうだ、そう思った村長は白虎山に登った。しかし村長も年を食っていて山奥まで登ることはできなかった。だから村長は山の麓から少し行つたところにある民家の庭の井戸にイエイチを投げ捨てたのだ。村長はその後何事もなかった顔をして村へと戻つた。驚くべきはそれから先の事よ。イエイチは数日たつてひよつこりと村へと戻つてきたんだ。なぜだ、死んだはずだと村長は驚きを隠せなかった。一方でイエイチも驚きを隠せなかったそうよ。どこまでが現実で、今自分の身に何が起こっているのかつて。金屏風は確かに破れている。首を絞められた記憶もある。だけれど、イエイチは詳しいことを何も喋らなかった。ただ自分の首のあざを見せて、村長を退任へと追いやった。そんなイエイチが何十年も経つてお爺さんになった時、やっと本当の事を手記に記し、それを家族へと託して死んでいったんだ」

「そこには、なんて書いてあつたの」

「ビヤツコヤマニハ オカシナミガ ソンザイスル ワタシガ オサナキトキ カオニ アタツテイタ アオ
イ タマシイヲ グゲンカシタヨウナ キノミガ イノチニフレタ ワタシハ イノチヲトリカエシタノダ
アレハ マルデ ヒトノミデアル」

「それで、ヒトの実があるつて」

「そうよ。私たちが生きていた時代はトトの実つてよばれていたよ。決して読みやすい字ではなかったから、

巻物に筆で書かれたヒトつて字がトトに見えて。それがヒトの実だつて気づいたのは、私の父さんが登山したときよ。虎に会つて教えられたつて。変な話よね。私はその時病名も分からない病に苦しんでいてね、父さんや姉さんに姉さんの友達。父さんの同僚と、あと、おじいさんが山に行つてくれたんだ。そこでは虎に生贄がいるつて言われてね。姉さんの友達が名乗り出てくれたんだ」

「それでおばあちゃんは助かつたんだね」

「いや、真相は違う。登頂を成功した四人は私の為に早く下山しようとしたけれど、父の想史は違ったの。帰り道、必死に虎を探した。元氣も残っていないのに父は名前も知らない虎を叫んで呼んだんだ。とらゝつてね。虎は父の前に現れ、父は虎に尋ねた。この実にはどんな力があるんだつて。命に触れる実の正体を教えてくれたつて。そしたら虎は答えてくれた。死んでしまったものがこの果汁を吸収すると生き返ると。そして命あるものがこの実を食らうと不老不死になれると。それを聞いて父はこの実を虎に差し出した。そして先ほど生贄となつた姉さんの友達、涉さんに使えと言ひ放つたんだ。それには虎も驚いたようで、取引は成立したよ。先輩は泥に埋まっていた分洋服は汚くなつていたけれど、傷口も何もない体の涉先輩は父たちの元に帰つてきたんだ。父はみんなにごめんと一言だけ呟いてね、全員無言で下山したそうだよ。行きも帰りも五人。だから五人の英雄として今語り継がれているんだ」

「それじゃあおばあちゃんは、病は大丈夫だったの？」

「私はだめだった。五人が下山したことなんて知らなかったよ」

「どういうこと。ヒトの実は一つしかなかったんだよね」

「ええ。ヒトの実は一つ、それは渉先輩が使い果たしたんだ。私はその選択に間違いはなかったと思っているよ。みんなが私の為に頑張ってくれたことが一番幸せで、幸せな思いのまま眠りについた。十分幸せな人生だったんだけどね、それでもみんなは私の為に尽くしてくれたんだ。私が未だ幼かった時、地球は異常気象の真ただ中でね、北の地方は山の麓でもとんでもない寒さだったんだ。それもあつて今では虎は絶滅しているはずだよ。一匹を除いてね。それに気づいた四人は死んだ私を白虎山に担いで連れて行ったそう。四人は膜の張った厚い氷をたたき割って、私を冷たい井戸の中に沈めたんだ。命がけで引き揚げられた私は息を吹き返すことができたんだ。その井戸はかつてイエイチが落とされた井戸だったんだ。それからというもの、今までのような呼吸の苦しさもなくなつてね。今も元気に生きていることを考えると、あの実は病すらも吹き飛ばしてしまう強力な実だったんだなつて。でも山の途中で虎に出会ったことや渉先輩が虎に噛まれたことを聞いて私は泣き出してしまったよ。辛かった。だから、もう誰もこんな思いをしなくて済むように、事実を捻じ曲げて伝説にしたんだ。虎なんかいない。ヒトの実なんかない。私を思つて命がけで登頂してくれたことに勇気をも

らって私の病は無くなったと。まだ医療も発達していない時代だから周りみんな信じてくれたよ。もちろん勇氣をもらったことは嘘なんかじゃなかったわ。最近はそのご都合主義な話も信じてくれなくなってしまつてね。中にはヒトの實の存在を信じ続ける人もいるし、幼い子の中では、そんな伝説の五人なんていないと笑う子もでてくるようになった。だから私は、今まで黙っていたんだ。咲にも咲のお母さんにもね。悪いことをしちゃったね」

「ううん。話してくれてありがとう」

「私の周りには人を想ってくれる人が多かった。それが幸せだった。もうその当時の人はみんな死んでいったけれど、みんな誇りのある私の大切な人なんだ。咲は、そんな人、いるかい」

「ううん。まだいないんだ。でも今回の登山で学んだことがあるんだ。人のために生きる人生は美しいし、そのためには、私はもっと芯のある人間にならなきゃなってしまう。おばあちゃんも皆に愛されたってことは、みんなを愛して生きていたんだよね。私もそんな人生を歩みたいなって思うよ」

「ありがとうね。もう、この人生に悔いはなくなったわ」

きよおばあちゃんは、目を閉じた。

永遠の虎

章子と九人の取り巻きがいなくなった。それは街では大きな問題になっていた。息子がいなくなったショックで精神の歯車が緩くなってしまった親御さんもいたくらいだ。だから彼らが帰宅したときには全員街を謝り歩いたし、すぐに登頂失敗という噂も広がった。これからは勝手に山に行けないようにと、山の麓にはバリケードも築かれるようになった。

その頃山に一人取り残された少女がいた。山頂に着いた章子は、頂上に聳え立つ大きな木を前にしてニヤけが止まらなかった。もうとづくに九人は下山しているというのに、未だそれにも気づかず、ただ上を見上げて一人で木に登る。彼女は試しに木になる青い実を強引にもぎって口に入れようとした。

「ちよつと待ちな」

「誰だ。さっきの虎か、いや違うな。誰だ」

「落ち着きなさい。君はまだ気づいていないのかね。君の仲間はどこに行った。誰もいやしないじゃない」

「なんだ老いぼれか」

「そうだな。二十くらいの娘には老いぼれにしか見えんだろうな。わしはもう何歳か数えるのを諦めてしまっ

たよ。その程度には生きておる。わしにもタダツグって名前があるんだ。よかつたら覚えておいてくれるかい」

「じじいが何の用だ。邪魔をする気か」

「老害と思うなら思ってもらつても構わない。けどな、わしは君より長く生きている分、君よりいろんなことを考える時間が長くあつた。そんな老いぼれの話に一度耳を傾けてみたらどうだ。わしはとうの昔に村長をしていた。人に選ばれるために必死で頑張つて地位を築いた。確かに金には苦労はしなかったが、村の皆からは一線を引かれた。村は皆家族のような仲のよさなのに、私はその輪の中には入れなかった。もちろん村を守るという宿命があつたからそれでもよかつたんだが、すこし寂しいと感じることもあつた。君には覚悟が見えない。嫌われる勇氣もない。何か大切な目的があつて動いてゐるわけではないように見える。自分の為に周りを都合よく動かそうとしているように見える。そんなの虚しいだけだとは思わないかい。誰かの事を愛して、誰かに愛されるような生き方の方が、華はないかもしれないけれど、よっぽど価値があるって、長く生きていて最近気づいたよ。どれだけ美しく見せようとしても、歳をとれば顔や体なんか劣化する。わしも昔はそれなりに顔は良かったんだけどな、今はそんな風には見えないだろう。髪の毛も白く汚くなつてしまつたしな。生きているものがその実を食べると死ねない身体になる。わしみたいにな。お前さんは今のまま不老不死の体にな

らないほうがいい。不老不死といっても若さが保てるわけではない。中身がなくて、自分の為だけに一生懸命で、薄っぺらくて、死ねない身体になってしまったばあさんなんて、誰にも必要とされないぞ。誰にも必要とされないことは、お前さんが望まない結末のはずだ。何度も言うが体はいずれは劣化する。劣化したときに中身が薄っぺらい人ほど必要とされない。人のために生きられる人の周りには、自分の為に生きてくれるひとが次第に集まるようになる。だから人生はどんどん面白くなるんだろうな。今は君の価値は街の皆の評価次第で上下している。そうさせているのはお前さんだ。他人の顔色や行動が気になって仕方がないだろう。自分が欲しい物ではなく他人が凄いやと言いたいようなものが欲しいと思うだろう。自分が歴史を変えたって称賛されたいんだろう。だから死ぬ気でこんなところまで来た。ちやほやされたいタイプなんだろう。でも誰もついては来なかった。きつとこれからも、変わらなければそのままさ」

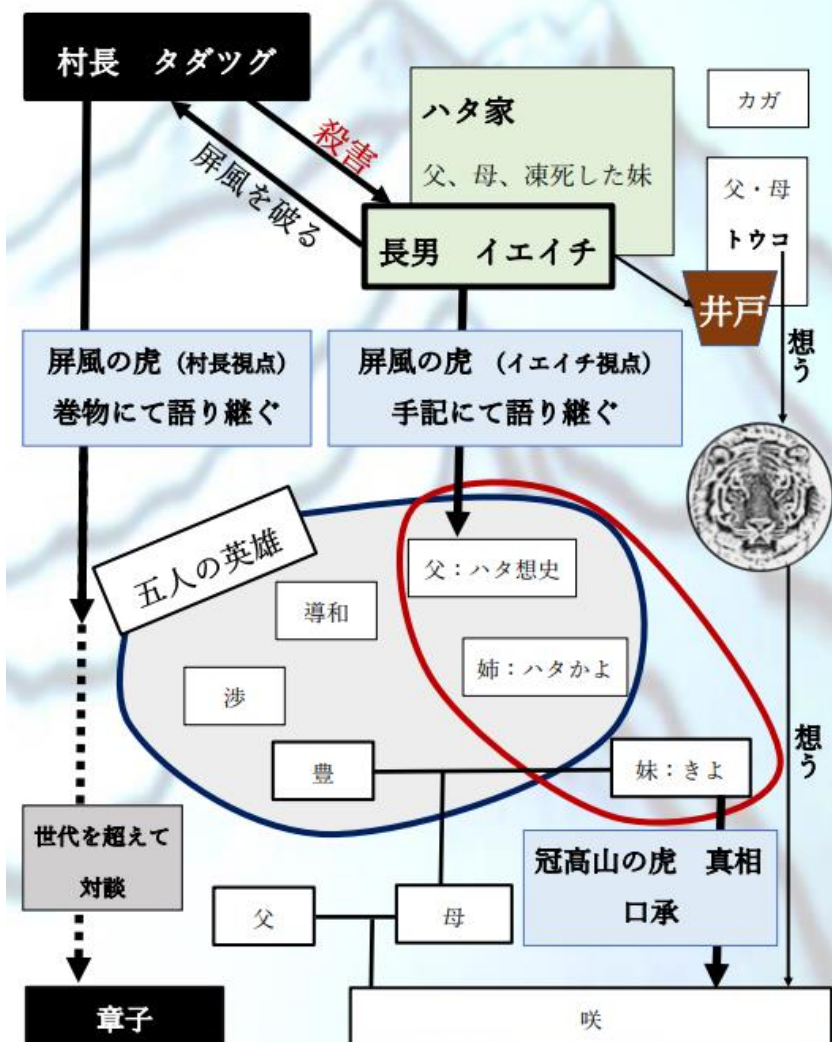
「なぜそんなことを私に言う」

「わしも死ねない身体になってしまったからな。今を生きる人に迷惑はかけないよう、自分ができることをしようとしているだけさ」

「そうかい。そりや結構なこと」

そうあしらって、章子はヒトの実を食べたとさ。





寅年の作者によるあとがき

最後までお読みいただきましてありがとうございます。今回は初の短編小説として、文字数はいつもの約十分の一の作品となりました。いつもは長編物ですが、短編もおもしろいですね。また何か書くかもしれません。いつもと同じノリであとがきを描きますので、ひょっとしたら一章分より長いあとがきになってしまうかもしれませんね。あとがきでは作中で触れなかった設定のお話も記しますので、ぜひ最後までお付き合いいただけると幸いです。

今回の小説のテーマとなるのは、作品中でも記しましたが、「いかに人の為に生きることができるか」というものです。「自分の為にしかいきれない人は、気づかないうちに社会に使われるだけの存在になるか、誰にも愛されない人生を辿り、幸せを実感できずに生き続ける。それを社会のせいにして、いつまでも心が貧しいまま老いて死んでいく……そうなっているといけないぞ!」という意味を込めた作品です。小説の中では描写としてあまり目立たせませんでしたが、「大きい虎を捕まえて評価されたいと虎狩りに行って、山で死んでいった人たちがヒトの実になる」というのが、「気づかないうちに社会に使われるだけの存在になる」ということを示しております。さて、本作の中で章子の度が過ぎた承認欲求について少し強調して描きましたが、人間に承

認欲求があること自体には何の問題も感じておりません。僕にもあります。むしろ承認欲求があるからこそ人間は時に頑張れるのかもしれませんが。若者はいずれ大人になる。それは出産のときかもしれないし、もつと遅いかもしれない。そこで「誰かの為に生きよう」と心の底から本気で思う瞬間が誰にでも来ると信じています。だからこそ若さゆえの富を楽しむことも、人生としては大賛成なのです。もちろん歳をとってから若作りをすることも全く否定的ではありません。問題視している点は「人からの評価を得ることが全て（生きる目的）になってしまい、周りが見えなくなってしまうこと」です。それが故に人は人をを陥れたり、人を傷つけてしまうのではないかと感じています。そんな人間にはならないようにしたいですね、という思いで執筆しました。

さて、白虎山の虎が初めて喋った時、どう思われましたでしょうか。うすうすお気づきかと思いますが、虎が喋るというアイデアは山月記から来ています。この虎は喋るどころか、時代を超えて長く生き続けています。もちろんフィクションなので、虎に関しては何もかもがありえない設定なのですが、その理由をあえて筆者目線で追記するなら、神様の仕業といったところになりますでしょうか。トウコの足枷を外してあげる行動で人の優しさを知った虎、それを見た神様が、「長く生かしたい、人と交流できるようにしてあげたい」と、思っあ虎が生まれたと思っください。なので、初めてトウコと虎が出会ったとき、虎は未だ喉を鳴らす

ことしかできず、喋れていません。

この作品は自分の四つ目の作品です。「愛した人の罪」「ハルカ・ヘルカ前後編」はともに自分の知り合いを登場人物にしておりましたが、今回の小説では一人も知り合いを登場させておりません。それは登場人物の名前にも小説に沿った意味をもたせたいと考えたためです。せつかくなので登場人物の名前と性格を全員分追ってみましょう。

・幼き頃に殺され井戸に落ちた少年イエイチは、家族が一番という由来で名付けております。金の屏風を破った行動はまさに、家族思いにあふれた行動でした。ハタ家は家族の事を一番に考える家でしたが、その両親は虎捕獲時に得られる大金が家の為になると考えて、娘を死なせてしまいました。歩けない娘を家に一人残していくわけにもいかないというのがまた、浅はかではありましたが家族主義の考え方の一つでした。

・カガは苗字なので特筆する意味はありませんが、彼は目立ちたいという思いのある独り身の男性でした。後日談にはなりますが、虎の生息情報を持って帰るも、皆カガではなく生息情報の方に興味を持ってしまい、その虚しさから彼は虎狩りを行わず余生を過ごしました。

・村長は物語後半で本人が語っている様に、村長という立場の寂しさから、村を賑わせようと必死になっていました。時に人としての過ちを犯してしまいました、長い年月をかけて生まれ変わったともいえるのでは

ないでしょうか。タダツグという名には真心を込めて語り継ぐという意味が込められています。

・虎を助けたトウコは等しい子という意味で、虎の凶暴さや事前情報を取っ払って、その相手に等しく向き合うことができる子になれるという思いで名付けています。

・想史はいつまでも人を想い続けるという由来、かよは漢字で表すと加与、きよは寄与となります。作品中ではこつそりと触れただけでしたので補足いたしますが、この三人は、最初に虎を捕獲したハタ家長男の子孫にあたります。そのため、家族主義の精神が根付いておりますし、想史はヒトの実の存在を知っていたという設定です。この一家は常に誰かの為に生き続ける模範的な家族であつてほしく、それが巡り巡って、一家の幸せと繋がるといいなと思ひ筆を走らせていました。

渉先輩は自分で決めた道を渉る、同僚導和は平和の方向に導く、きよの彼氏(きよおばあちゃんの夫)の豊は人に豊かさを与えるという由来です。この五人の英雄は目的が明確でかつ、皆が誰かの為に生きていたから、登頂に成功したといえるのではないのでしょうか。章子は他者の「承」認にすぎる子、咲は「先」の事まで考える子という由来です。章子という名前には正直かなり悩みました。小説を執筆する以上、性悪説とはちよつと違ふかもしれませんが、予め彼女の性格を知ったうえで命名しなければなりませんので難しかったです。承認欲求の承とはいいましたが、そんな未熟さも若さならではの信じ、区切りをもつて大人になってほし

いという意味で「章」という字を用いました。

さて、最後にヒトの実を食べてしまった章子は、もう二度と死ねない身体を手にしてしまうことになりました。ここから何十年、何百年と経って、彼女はどのような姿になっているでしょうか。こればかりは、誰にも分らないですね。死ねない体といえば村長のタダツグもそうでした。本文中ではあえて触れない方が面白いかなと思います。そこで自分がイエイチを落とした井戸に行き、その正体を探ろうとしているときに、自らも足を滑らせて落ちてしまった、というのがタダツグが死ねない身体を手にしたバックグラウンドです。虎はトウコの庭の井戸にヒトの実を三つ落としてきました。一つの実につき一人に効果がある、という設定ですので、その恩恵(?)を受けたのが、イエイチ、タダツグ、きよの三人ということになります。この小説の最後の方で気づいていただいた方もいらっしゃるかと思いますが、タダツグがヒトの実を啜えた虎と遭遇した時、タダツグは死体の隠し場所を探していたんですね。そう考えると、タダツグが語り継ぐ屏風の虎という物語は意外と嘘だらけかもしれません。タダツグは筆師に本当に深々と頭を下げたのでしょうか。本書に掲載している「屏風の虎」はタダツグ視点の物語ですので、どこからが本当でどこまでが嘘なんだろうなんて思いながら読むと、また違ったストーリーが次々と生まれてくるかもしれないですね。

さて最後に、なぜ登場した獣が虎だったのかを記して終わりにしたいと思います。先ほどアイデアは山月記から来ていると記載しましたが、サルでもなく雪男でもなく、虎にしたかった明確な理由があるんです。虎と言えば皆さんご存じ、や政界ではヒエラルキーのトップに君臨する恐ろしい哺乳類です。生きるためではありませんが、肉食で回りの哺乳類を容赦なく殺します。もしも僕たちが自然界で虎に遭遇したら、殺されるかもしれないときと身構えるでしょう。しかし虎はネコ科の動物です。僕はネコが大好きです。時にひっかいてくるような不愛想な猫もいますが、人にすり寄ってくる優しい猫もいます。そう考えると、虎ももしかしたら優しい心を持っているかもしれません。しかし、人間は怖がって虎には近づかないわけです。それは自分が殺されるかもしれないと感じるからです。これを今回の物語に置き換えるとうなるでしょう。自分第一主義で周りを蹴落としてヒエラルキーの上に登り詰めようとする人は、後から改心して優しい気持ちを持ったとしても、なかなか人々は信じてくれなくなるのです。だから、もし自分が虎かもしれないと少しでも心当たりがあるのであれば、虎になってしまう前に、自分の行動を見直しなさい、という思いで虎にしました。少しでも誰かの人生のヒントになればと思って書き綴った小説なので、あまり悪い気はなさらず、読み収めていただければ幸いです。最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

白虎山

発行日 令和四年九月三十日

著者 鳥居 大誠



古くから語り継がれる物語に疑問をもったことはないだろうか。
然程たいそうなお話でもないのに、なぜ百年も語り継がれるのかと。

本書の最初の章にある「屏風の虎」という物語も
一時期は村の誰もが知る有名なお話であった。
しかし時の流れにより、いつしかこのお話は
記憶の果てに葬られていくのであった。

従って現代に生きる子どもたちは
この「屏風の虎」という物語を誰も知ることはできなかった。
とある少年が井戸に落ちなければ。